

『終わりなき旅の行くえ 裕子 yukoh』

加藤義夫(インディペンデント・キュレーター)

思い起こせば確か 1983 年の夏、私はかつて大阪にあった版画工房「October24」で、美術家の塚本裕子と出会った。武蔵野美術大学を卒業した塚本は、大学時代に油絵を□村井正誠とリトグラフを□清水昭八に学んだ。日本の現代絵画を代表する巨匠に師事していたわけだ。

その版画工房で塚本は、リトグラフを制作していた。それも屋外で。リトグラフのプレス機を庭のような場所に置き、かたわらに水の入ったバケツ、そして手にスポンジを持ち、ローラーでインクを亜鉛版にのせる作業をしていた。

それが彼女との最初の出会いであり、今でも印象深く記憶に残るワンシーンだ。

それから四半世紀以上の時が流れた。相変わらず、塚本は美術家として制作にいそしんでいる。「継続は力なり」の言葉どおり、制作発表活動を続けている彼女に尊敬の念を抱くとともに、美術家としての資質を感じる。

塚本は、2003 年から制作の拠点を日本からイタリアのミラノに移し、制作活動をおこなっている。絵画、銅版画(メゾチント)、陶芸という平面と立体、そしてインスタレーションという手法を駆使し、自らの芸術表現としている。

暗闇の中に潜む、ほのかな光。

閃光のように輝く強い光ではなく、自らが発光しているような輝きを持つ、ささやかな灯火(ともしび)。

塚本裕子の「Linfa(樹液)2009」と題された作品に、暗闇の光を感じる。

樹木から放たれる光の言葉は、樹液となって流れ出す。

画面上の地と図の関係でいえば、暗闇の空間が地で、流れ落ち飛沫する光(絵の具)が図となろうか。日本古来の水墨画が反転したような光景が写し出されている。

永遠の闇(宇宙)の中に美しく飛び散った光の絵の具に、天文學的な時間を感じる。しかし、時は沈黙し止まっているかのようにも思える。

樹木の言葉を紡ぎ出し、沈黙の時間とほのかにきらめく光が暗闇の空間に漂う。

そのほのかな光とは彼女自身なのかもしれない。

塚本は、樹木に魅了されるという。

自然を象徴しているともいえる樹木、そこには、自然の精靈が宿り、宇宙と交信している姿が浮かび上がる。

樹木の生きる時間は、人よりはるかに長い。五千年いや一万年近くを生きる縄文杉もあるという。だから、樹木とは森の賢者でもありうるのだ。

人の命は短くはかない。だからこそ、樹木という賢者に導かれ、彼女はそのささやきに耳を傾けてきたといつても過言ではない。

塚本の作品の中に頻繁に出てくる小箱がある。「il silenzio(沈黙)2009」と題されたセラミックの小さな 12 の箱のオブジェ、その上に真っ白な鳥の羽が。

閉じられた箱とは、精靈の眠る場所。それとも、生と死が交通する場としての箱なのか。羽は自由の象徴、それとも天空へ魂を運ぶ翼なのか。

塚本の作品には、生命と精神に関わるキーワードが隠されているように感じる。それはまさに「命と心の芸術」を意味する。

それらを「肉体と精神」とも言い換えることができる。肉体とは精神を納めておく入れ物、ちいさな箱なのかもしれない。

樹木の精靈を描き、セラミックで魂の箱を創る塚本。

彼女の想いは、自らと自然、あるいは自らと世界との距離と位置関係を確かめ、自身が何者であるかを知るために注がれているようだ。

少女の頃から精神世界を漂い、自らの世界を追い求めて、さまよい歩いてきた彼女。巡礼者のような果てしない旅の行き着く果てはどこなのだろうか。

塚本の心の旅路を見守りたいものだ。

注□ 村井正誠(1905~1999)岐阜県に生まれ和歌山県で育つ。

1937 年に自由美術協会を創立。1954 年から 1975 年まで武蔵野美術大学教授。1995 年神奈川県立近代美術館、大原美術館などで巡回個展が開かれた。

注□ 清水昭八(1933~)和歌山県出身の画家、版画家。モダンアート協会会員。